

ローマ人への手紙1章16節 「恥としない福音」

1A 良き知らせ

1B 王の凱旋

2B 御子の現れ

2A 福音による恥

1B いのちの喪失

2B 苦しみの中にある愛

3A 神の力

1B 救い

2B 信じる全ての者

本文

ローマ人への手紙 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の旅は、ついに使徒たちの手紙に入ります。これまでは、物語というか、歴史を見てきました。イエス・キリストの生涯、そして主が天に昇られてから、弟子たちに聖霊が降り、その聖霊の働きにより、主の御名を伝えて行った働きを見てきました。そして前回、パウロが、ローマにおいて福音を宣べ伝え、みことばを教えていた場面を見ました。「使 28:31 少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」とあります。

彼は、ローマで証しをしたいと切に願っていました。その強い願いと祈りは、実に、彼が第三の宣教旅行でコリントにいた時には既にあり、そこからこの、ローマ人への手紙を書き記しています。紀元後 57 年頃です。その祈りと願いがかなえられたのを、28 章で読んだのです。パウロは、ここで福音を宣べ伝えたいと願っていました。それで書いたのが、16 節の言葉です。ローマ人への手紙全体の要になる言葉です。「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人も、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」福音にある神の力、救いをもたらす力です。

私たちがこれから、ローマ人への手紙で、神の福音の力がどれだけすぐれているかを知ることができたらと願っています。使徒の働きでは、聖霊の力、証しのための力を見ました。ここの「力」という言葉は、同じギリシア語、デウナミスです。ダイナマイトの語源になっているギリシア語です。私たちが、ロマ書の学びによって自分自身が変わえられる体験ができたらと切に祈り、願っています。

ところで、パウロの書いたローマ人への手紙によって、確かにキリスト教会が変わられたといっても過言ではありません。教会の歴史、教会史の中に、三人の偉大な人物がいます。古代には、アウグスティヌスがいます。古代においては最も影響力のあった神学者と言えます。彼は、淫らな

放縦の生活を送っていましたが、ロマ 13 章 13-14 節にある言葉で救われました。「遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼間らしい、品位ある生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを来なさい。…」中世、いやルネッサンスの時には、プロテスタント運動の父、ルターがいます。私たちもプロテスタントの教会ですが、彼の功績にどれだけ負っているかしれません。彼は、神の前に立つことのできる義は、自分の行いではなく、信仰によって与えられるのだと確信するに至りましたが、それが今日学ぶ、1 章 17 節を読んだからです。「義人は信仰によって生きる」。そして、祈りと実践の生活、聖霊の満たしなど、敬虔に生きる運動で、メソジスト運動というものが、イギリスに 17 世紀に起こりました。その創始者、ジョン・ウェスレーは、このルターのロマ書の講解を司会者が読んでいるのを聞いている時に、回心したのです。ですから、基督教の歴史の初めから終わりに至るまで、靈的に大きな前進を与えたのは、この書物なのです。

身近なところでは、カルバリーチャペルのチャック・スミスは、「この書を学べば、教会が変わる。」と教えられて、それで教え始めたら、自分自身が変わった！と言っています。神の恵みによって変えられたチャックがいたからこそ、世界に二千、三千とあるカルバリーチャペルが存在しているのです。パウロの宣べ伝えている福音は、それだけ人々を変えます。そしてみなさんを変えてくれることを信じます。

1A 良き知らせ

まず、パウロがここで語っている「福音」とは、どのような背景で話しているのかを話したいと思います。パウロは何度となく、福音は、預言者たちの語っていること、前もって聖書に明らかにされていることだといいました。また、ローマの人たちにもよく知られた言葉でもありました。当時の人々がどのように聞いていたのか？を考えてみたいと思います。

1B 王の凱旋

「福音」とは良い知らせです。預言者イザヤが、「良い知らせ」についてこう語りました。「52:7 良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神は王であられる」とシオンに言う人の足は。」当時、イザヤが預言を行った時に、すでにエルサレムがバビロンによって滅ぼされ、捕囚の民となるが、けれども、神は必ず帰って来てくださり、民を戻してくださるという約束を語っていました。エルサレムが滅ぼされて、そこが廢墟となっている時に、そこに、この良い知らせを携えてくる人がいたのです。「それでも、あなたがたは大丈夫だよ。私たちの王は神なのだ。」そういつて、わずかに残された民に、良き知らせを告げてきたという約束なのです。その足は長い旅でずたずたになっていたことでしょう。しかし、イザヤは、そのずたずたになった足を、「なんと美しいことか」と呼んでいます。それは、それでも王なる神がおられて、また戻って来てくださるという希望を携えていたからです。

ギリシアやローマの世界では、戦いに勝ったことを告げる足がユーアンゲリオン、良き知らせ、福音と呼ばれました。ギリシアの戦いには、有名なマラトンの戦いがありますね。攻めてくるペルシア軍に対してギリシア軍がマラトンで戦い、勝ったので、その喜びの知らせを何と 40 キロ以上も離れているアテナイ(アテネ)にまで走って行って、伝えたという逸話です。完走した後に絶命してしまいました。それで長距離マラソンの競技が生まれましたが、良き知らせですね。ギリシアにとって、自分たちの王がまだおられる、王がこれで町を凱旋できると思ったのです。ローマの世界では、ローマ帝国が世界に平和をもたらしたとして、全ての戦いの勝利した王、カエサルが「救い主」と呼ばれていました。その喜びの知らせが、ユーアンゲリオン、福音だったのです。

2B 御子の現れ

私たちにも、良い知らせがあるとほんとううれしくなりますね。コロナが収束してほしいと願いますが、仮に日本政府が絶妙な対策を講じて、収束に向かせたら、私たちには大きな喜びがきますね。大げさですが、「我々に救いが来た！」と喜ぶのではないのでしょうか？これが、福音という言葉の背景であります。そして、私たちにはその福音が必要であり、聖書に約束された、預言者が語っていたキリストこそが、まことの王であられ、この方が来られたことによって私たちが救われたのだ！というのが福音なのです。ですから、教会にとって、イエスを信じ、受け入れたという人が現れた時に、大きな喜びが起こりますね。そこに神を王とする人が加えられた、神の王国が広がったと知るからです。

2A 福音による恥

そこでパウロは、「私は福音を恥としません。」と言いました。私たちにとっては、大きな喜びであるはずの、イエス・キリストの福音ですが、この世界においては喜びどころか、受け入れられない、あるいは無視されるというのが常です。いや、イエス様は、「あなたがたは、わたしのゆえに世に憎まれる。」とまで言いました。

1B いのちの喪失

ですから、この良き知らせを伝えること、またその中に生きて行こうとするものなら、自分を捨てていかなければいけなくなります。イエス様は、「マルコ 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」と言われました。福音を信じて生きていく時に、それが愚かに思われても、弱い奴だと思われても、時には強い反対を受けなくても、それでもこの方を証ししていけるか？という、そうではありません。隠してしまおうとしてしまうのです。それが、ここで言っている「恥」です。私たちは、自分がどう思われるだろうという気持ちが働きますね。「世間体」です。恥とは、世間体のゆえに福音の中に生きない、この良き知らせを良き知らせとして伝えないことを意味します。

しかしパウロは、キリストのゆえにむしろ愚かになろう、弱き者になろうとしました。本当は愚か、

弱いことではありません。世がそのようにみなしているだけです。けれども、それをよしとしたのです。「I コリ 1:27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。」神は、弱くされて、愚かにされた私たちを通して、むしろ聞いている人々が自分の愚かさ、弱さが明らかになるようにされています。

2B 苦しみの中にある愛

そして、福音の中に生きるということは、世において苦しむこととなります。イエスの語られた神の国は、世とは正反対のことを言っているからです。心の貧しい者は幸いです。悲しむ者は幸いです。柔和な者は幸いです。義に飢え渴く者は幸いです。というように、心豊かにしていこうよ。喜ぼうよ。主張すべきことはそうしていかないと。正義でなくて、世渡り上手にならないとね、とか。日本の中で、キリスト者として生きているのは、ぶっちゃけて言うと、「まあいいけど、信じなくても別に、普通に生きていけね？」となりませんか？キリスト者として生きるのが、何か徒勞であるかのような錯覚に陥らないでしょうか？そこで、あきらめたら福音を恥とすることです。

パウロは、福音を恥としないという時に、とてつもない苦しみを経て来ていました。しかし、そのような苦しみの中にあっても、圧倒的な勝利者なのだと言いました。苦しみの中にあつてさえ、神のキリストにある愛は自分を引き離すことはないからです。「8:35-37 だれが、私たちがキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。36 こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」37 しかし、これらすべてにおいても、私たちが愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」キリストの愛ゆえに、パウロは苦しみの中にあっても自己憐憫に陥ったり、被害者意識にとらわれることがなかったのです。福音を恥としませんでした。

3A 神の力

そして、「福音は、…神の力です。」と言っています。福音は、ことばで理解するものとは言っていません。神の力だと言っています。先に話しましたように、この力はデウナミスです。ダイナマイトの語源になっている力です。理屈抜きの力です。パウロは、コリントの人たちにこう書いています。「I コリ 2:4 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」テサロニケの人たちには、こう言っています。「I テサ 1:5a 私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。」パウロは、言葉で語っていましたが、言葉の理屈で理解したのではなく、受け入れた彼らには力となって受け入れられていったことを目撃しています。

テサロニケの人たちは、「偶像から神に立ち返った(I テサ 1:9)」とパウロは言っています。そしてコリントの人たちは、大きな変化を遂げました。「I コリ 6:9-11 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶

像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。11 あなたがたのうちのあの人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」以前はそのような者でした、と言っていますから、今は違うのです。これだけの罪と悪を行っていた者が、今は洗われ、聖なる者とされ、義と認められているのです。

先週、両親が救われた証しをしましたが、実家に戻りましたら、すでに心が洗われた、喜びの表情をしていました。家には同じ部屋に、神棚と仏壇がありましたが、神棚にあったものはすべて片付けられ、仏壇も戸が閉まっていました。変わったのですね。私自身は、理屈抜きで、自分の抑うつが直りました。このことを、あるクリスチャンのテレビ番組で証したことがありました。鬱の問題のある息子さんを持つお母さんからの相談の電話を受けました。どうすればよいのか？と。私は答えようがないのです、「イエス様に会ったから」としか答えられないのです。イエス様に触れていたいただいた福音書の人物が治りますよね。私も、イエス様が会ってくださったからとて言えないのです。自分の罪のために死なれ、よみがえってくださったイエス様が来てくださったとしか、言えないのです。それは幻とか、目に見える形ではありません。ただ、主に触れるということだけでした。

もし、福音を知的に理解しているだけでしたら、その人は福音をまだ知らないということになります。その本質は力であって、知的理解ではないからです。伝道者であるビリー・グラハムが、来日して、東京ドームで福音を語った時に、私たち夫婦はそこにいました。彼はもうすでにその時に高齢でしたが、手を前に差し出したのです。「私はパーキンソン病にかかっています。パーキンソン病の人は、震えてしまいます。けれども、私は薬を飲んでいますが。薬を飲むと震えが来ないのです。私は、薬がどのようにして震えを止めるのかは分かりません。けれども、薬を飲めば、震えが止まることは知っています。」こう言ったのです。製薬会社の人であれば、その薬を創った人であれば、分かるでしょう。同じように、神の福音を用意された神ご自身は分かりますが、私たちは、この福音を聞いて信じ、受け入れるのであれば、それが救いに至ることは知っているのです。自分を変えることは知っているのです。大事なのは、信じて受け入れることです。

1B 救い

そしてパウロは、この神の力によって「**救いをもたらす**」と言っています。ただ力があっても仕方がないですね？いろいろなことをすることができるパワー、力を得ることでしょうか？違います。かつて、麻原正晃は空中に浮かんだとかいう力を見せましたが、それで？であります。彼は、多くの人を惑わし、自分自身も落ちぶれて、死刑になりました。これは、人に救いをもたらす力です。

救いというのは、何か？それは、神が初めに造られた、ご自分の似姿に造られた姿に回復することです。キリストにあって、神の似姿に変えられることです。そして、世界が、神が初めに造られ

たところに回復することです。アダムが神に背いて、その罪が世界に入り、人が神のいのちから離れ、土地も呪われてしまいました。その罪を取り除くためにキリストは来られました。罪を赦し、癒し、解放し、神にある喜び、平安を与え、将来、回復された神の国に入ることです。福音書の中で、罪が赦され、心が癒され、また体が癒された人々に対して、イエス様が、「あなたの信仰が、あなたを救いました。」と言われました。

パウロは、ロマ書において、罪のゆえに神の正しい裁き、神の怒りを受けなければいけないと教えています。神の怒りから救われることがあります。神の前に出ても、あたかも罪を犯したことのないようにみなされるようにしてください。そして、神の栄光の姿にあずかることを教えています。神と敵対していたところから、神が和解してくださり、その平和を楽しむことが約束されています。あらゆる側面での救いであり、神から離れているところから取り戻される場所の救いです。

2B 信じる全ての者

そして、その救いは「**信じる…人に**」与えられます。ここがロマ書の醍醐味で、信じる者が義と認められるということです。私たちはどうしても、自分の義を立てて、それで正しいと認められないといけなく考えます。けれども、それでは罪意識がますます強くなるだけであることを、ロマ書でパウロは論じます。そうではなく、義なる神を徹底的に信じることなのです。完全にお任せすることなのです。

信じるということは、自分の判断や力を、他の人にゆだねることです。自分が友人と登山して迷ってしまったとします。全く方向感覚が失われてしまいました。そこに、現地のおじいさんがいました。これで助かりました、いのちも救われます。彼が歩く道を、そのまますぐ後についていきます。そのおじいさんを信じて、ついていっているのです。そこでは、自分の判断や知恵はただ、このおじいさんの行く所についていくことに集中しています。自分が方向は分かっているという思いが少しでもあるなら、自分は見失うことでしょう。それが、自分の義を立てようとするのです。まだ信じていないのです。サーカスで、空中ブランコがありますが、ある人が相手のブランコに飛び乗る時に、相手を完全に信頼して、力を抜かなければ、相手はきちんと自分を掴むことができないそうです。どれだけ信頼できるか？にかかっています。

それと、神を信じ、キリストを信じることは同じです。自分の判断や理解、力は捨てて、この方の成し遂げてくださったことに自分自身を任せることです。私は、一般の日本人の家庭に生まれ育ちました。仏教や神道を習慣として守っていました。その私がキリスト者になるということは、まさに飛躍でした。これまでの自分というものから離れていく気分でした。清水の舞台から飛び降りる思いでした。そして信じてからも、やはり、信じて生きるのです。問題が起こる時は、自分の行いが足りないのではなく、この方への信頼が足りないのです。

そして、「ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に」とあります。ここが、パウロが手紙を書いたところの醍醐味です。ユダヤ人だけでなく、ギリシア人にも、すべての人が信じることによって、救われます。信じるということは、空気を吸うように、民族や地位や性別など全く関係なく、だれでもできることであり、差別がありません。ユダヤ人には、救われることは保障されていますが、異邦人は割礼を受けて、モーセの律法を守り、改宗することによって初めて救われました。しかし、そうではなく、信じることによって心が清められるので、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも救いが及ぶのです。あらゆる人が、キリストの御名によって救われ得るのです。

ここでパウロが、「ユダヤ人をはじめ」と言っていますね。順番はユダヤ人が始めでありました。神はアブラハムを呼ばれ、彼からイスラエルという国民を造り、イスラエルの子孫によって、世界の民族に祝福を与えるご計画を神は持っておられます。それで、イスラエルにまず救いの使信が届けられたのです。イエス様が地上に来られた時も、イスラエル人に福音を宣べ伝えられました。彼らが拒むので、それで異邦人にも救いが及ぶことを語られました。パウロも同じ順番を経ました。ユダヤ人の会堂に行きました。彼らの一部は信じますが、多くが拒みます。それで福音を異邦人に語りました。そうやって、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも信じる人に救いを与える福音となったのです。

「すべての人に」ということで、二つの意味、目的があります。一つは、「どんな人であっても」ということです。どんなに罪深く、どうしようもなくとも、ということです。実は、自分はそれほど悪くないと思っている人も、神の前にいかに罪深いかをパウロは、ロマ書 1 章から 3 章にかけて論じていきます。けれども、自分がどんなに神から愛される理由がない、好意を持たれることはない負い目があっても、そこにまでキリストは届いてくださるのだということです。パウロは、自分はキリスト者を迫害したので、「罪人のかしら」と自分を呼びました（I テモ 1:15）。そんな自分でも神が救って下さり、この恵みを宣べ伝えるように召されたのだ、という事を言っています。

もう一つの目的は、「一つになる」ということです。午後礼拝で、パウロがローマ人への手紙を書いた背景を詳しく説明しますが、ユダヤ人と異邦人の間で、教会で、文化的、習慣的な違いで一致が難しくなっていました。しかし、福音は、信じる者すべてに救いをもたらします。そこには差別はありません。ゆえに、キリストにあって一つになっています。ロマ書は、とにかく、私たちがどうすれば救われるのか、という自分の救いのみで読んでしまいがちですが、実は、キリストにあってみな同じなのだ、ということも教えてもいるのです。

いかがでしたでしょうか？この救いの喜び、うれしい知らせの中に生きて、この世においては恥と思われることも偲ぶ道か、あるいは、この世と歩調を合わせるために、喜ばしい知らせは横に置いておく、ということになるでしょうか？

The *gospel is the power of God*¹⁶⁰ for salvation (for *gospel* see on v. 1 and for *power* on v. 4). Paul is fond of contrasting mere words with power (e.g., 1 Cor. 2:4; 4:19–20; 1 Thess. 1:5; power and the gospel come together again in 15:19; 1 Cor. 1:18, 24; 2:5; cf. 2 Cor. 13:4; Eph. 3:20; Col. 1:11; 2 Tim. 1:7). No such contrast is explicit here, but Paul makes it plain that he is greatly interested in the power he sees in the gospel. The gospel is not advice to people, suggesting that they lift themselves. It is power.¹

Paul refuses to accept shaming in respect of the *gospel because it is the power of God that brings salvation to everyone who believes*. By thus stating his firm conviction concerning the efficacy of the gospel, Paul also introduces the main thesis to be argued in his letter. In what follows he will expound and defend this understanding of the gospel as ‘the power of God that brings salvation to everyone who believes’. In 1 Corinthians 1:18–25 Paul acknowledges that his gospel is regarded as ‘foolishness’ by those who reject it but insists that it is the power of God for those who are being saved. By the time Paul wrote Romans he had witnessed repeatedly the power of God released through the preaching of the gospel bringing salvation to those who believed. He had seen people turn from idols to serve the living and true God (1 Thess 1:5, 9; 2:13), and have their lives morally transformed. Paul’s clearest description of the latter is found in 1 Corinthians 6:9–11:

Or do you not know that wrongdoers will not inherit the kingdom of God? Do not be deceived: Neither the sexually immoral nor idolaters nor adulterers nor men who have sex with men nor thieves nor the greedy nor drunkards nor slanderers nor swindlers will inherit the kingdom of God. *And that is what some of you were. But you were washed, you were sanctified, you were justified in the name of the Lord Jesus Christ and by the Spirit of our God.* (italics added)²

¹⁶⁰ Luther comments, “ ‘power of God’ does not mean that power by which he is powerful in himself but that power by which he makes powerful and strong”; for examples he cites Luke 1:35; 24:49; Acts 1:8; 4:23.

¹ Morris, L. (1988). [*The Epistle to the Romans*](#) (p. 67). Grand Rapids, MI; Leicester, England: W.B. Eerdmans; Inter-Varsity Press.

² Kruse, C. G. (2012). [*Paul's Letter to the Romans*](#). (D. A. Carson, Ed.) (pp. 67–68). Cambridge, U.K.; Nottingham, England; Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans Publishing Company; Apollos.

The power of God of which Paul writes is not aimless but directed to *salvation*. It issues in salvation. This is the general term of which justification, redemption, and the like are particular aspects. Leenhardt sees it as signifying “all the blessings which God alone can give in answer to the need and longing of man, who is oppressed and in anguish in face of a destiny which sharpens his need of supernatural beatitude in proportion as it does nothing to satisfy it.”¹⁶³ Salvation is a very positive affair; it brings a rich variety of blessings from God (5:10–11; 1 Cor. 1:18; Eph. 2:13, etc.). But it also has negative aspects. People may be saved from wrath (5:9), from hostility to God (5:10) or alienation from him (Eph. 2:12), from sin (Matt. 1:21), from being lost (Luke 19:10), from futility (1 Pet. 1:18), from “a yoke of slavery” (Gal. 5:1), from demon-possession (Luke 8:36), from sickness (Luke 8:48), from danger (Matt. 8:25–26), from a “corrupt generation” (Acts 2:40). Salvation has many facets. There is a sense in which it has already been achieved (Eph. 2:5), and another in which it is a present, on-going process (1 Cor. 1:18; 2 Cor. 2:15), but often the New Testament writers see it as future (13:11; 1 Cor. 5:5; 2 Tim. 4:18, etc.).³

¹⁶³ Cf. Moule, “The word is here probably used in its largest meaning, including the whole process of mercy from the time of belief onwards; deliverance from doom, sin, and death” (CBSC; he goes on to notice future and present positive aspects and notes that the meaning is concerned with rescue rather than amelioration).

³ Morris, L. (1988). [*The Epistle to the Romans*](#) (pp. 67–68). Grand Rapids, MI; Leicester, England: W.B. Eerdmans; Inter-Varsity Press.